

連携事業拠点を活用した中部山岳域の気象データセット構築
上野健一（筑波大学・生命環境系）・磯野純平（筑波大学・地球学類）

中部山岳域で進行する気候環境の実態を把握し、将来予測のためのモデル研究を検証するためには、多地点で日変化も把握できる気象データの取得が不可欠となる。現在可動している気象庁地域気象観測システム（通称アメダス）は主に低標高域の市町村近傍に分布し、高所山岳域や稜線域での継続的な観測地点は非常に少ない。地球環境再生プログラム・気候変動研究グループでは、2010年12月17日に開催されたミニワークショップでの議論を経て、中部山岳地域における山岳気象の素過程研究および気候モデル検証・分析に資する気象データの収集と共有化を図ることが合議された。2011年4月に、観測拠点間でデータポリシーに関する合意がなされ、5月に各大学が管轄・関係する山岳観測拠点での気象観測項目をリストアップし、6月以降に公開可能なデータの収集および部内での公開作業が筑波大学を中心として開始された。10月末時点でデータ公開用のホームページが完成し（図1）、研究グループ内でデータの公開が開始された。6拠点29地点（サイト）で、最長2006-2010年まで時間値データをアーカイブする目標をたて、研究グループへの参加は各大学の主幹で協議する事となっている。複数大学の管轄データを同一フォーマットでアーカイブする試みは画期的であり、サイトマネージャー・観測者の協力・貢献無くしては達成できない成果である。ポスターでも、アーカイブの状況とデータ利用の展望を紹介する。



図1 部内公開用の気象データアーカイブホームページ